

研究タイトル 学習環境としての大学図書館・ラーニング commons の計画に関する研究



氏名:	楠川充敏 / Mitsutoshi, KUSUKAWA	E-mail:	kusukawa@toyota-ct.ac.jp
職名:	助教	学位:	博士(芸術工学)
所属学会・協会:	日本建築学会		
キーワード:	建築計画, 施設計画, 大学図書館, ラーニング commons, 学習環境, 利用行動		
技術相談 提供可能技術:	<ul style="list-style-type: none"> ・大学図書館及びラーニング commons における利用者行動 ・学習環境としての開架閲覧室及びラーニング commons の設計・計画 ・大学キャンパス内の学習環境の事例紹介 		

研究内容:

□研究の背景と本研究の研究課題・目的

2000年以降、大学図書館の開架閲覧室では補えない機能を持った学習環境として、「ラーニング commons」が日本で整備されはじめました。近年では、大学生の主体的な学びを促し、アウトプットの場所になっています。

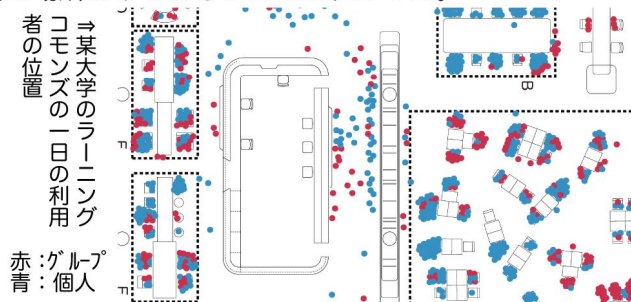
一方、開架閲覧室は、主体的な学びにおけるインプットする場に位置付けられますが、図書資料を保管・提供の特性から、必ずしも利用者主体の学習環境としては言い難い状態です。

インプットとアウトプットとの相互関係の中で「主体的・自律的な学び」を大学教育が担っていくことを考えると、両者を二分した整備を進めるのではなく、学習環境という単一のレイヤで再統合して、整備指針を検討する必要があると考えており、その計画のあり方を模索しています。

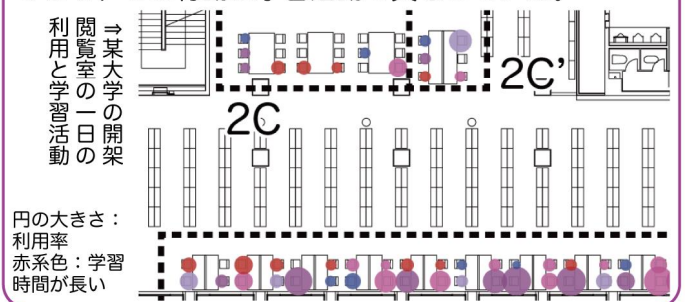
学生の「主体性」を念頭にした学習環境の構築にあたっては、学生の活動実態に則した評価と整備の指標設定が不可欠であると考えています。本研究では、開架閲覧室とラーニング commons の双方を対象に、学習活動時に学生が求める建築的な条件を解明し、学習環境整備の知見を得ることを目指しています。

□これまでの研究成果

にぎやかな LC にも個人でもくもくと作業する学生。静かな開架閲覧室では、時々話しながら勉強するグループ利用があった。それは、周りの音環境で座席が選ばれていた。ラーニング commons が必ずしもグループ利用の場所だけではないことがわかった。



どこの大学でも閲覧室の本や PC を使わない、つまり学習場所が欲しい思っている学生が4割いる。落ち着きをみんなが求めている。壁や柱、衝立等視線が切れる環境が選ばれる。そして、その行動は学習活動で異なっていた。



□研究内容の社会還元

これらの研究成果は、キャンパス内の学習環境はもちろん、公共図書館、学校図書館への援用も可能と考えています。また、フリーアドレス型の執務環境など、利用者が自由に居場所を選べる空間を調査対象にしています。

提供可能な設備・機器: 特になし

名称・型番(メーカー)	